

# ジャケットにおけるオートクチュール技法の解析 —平成23～25年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 「ファッション創造における芸術的技法の解析研究」追跡調査Ⅱ—

Analysis of Haute Couture Techniques in Jackets, Using the Haute Couture Jacket Designed by  
CHANEL in 1960: A follow-up Study on “An Analytical Investigation of Artistic Techniques in  
Fashion Creation” (Kitaori, T. et al. 2014. Strategic Research Base Development Grant-Aided Program  
by MEXT for Private Universities 2011-2013)

北折 貴子 中村 枝里子  
KITAORI, Takako NAKAMURA, Eriko

## 1. はじめに

本研究は下記の研究<sup>1)</sup>時に収集した資料の中で、内部に技巧を最も施した資料と素材を生かしてあまり内部細工していない両極端の資料を1点ずつ選んだ。前報に技巧を凝らしたバレンシアガの資料(資料W)を調査したため、今回は素材を生かした資料としてシャネルの資料(資料C)を調査することとした。

今回の資料を収集した研究は、平成23～25年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択され、「ファッション創造における芸術的技法の解析研究」<sup>1)</sup>を北折他5名で行った。この研究は、オートクチュールからプレタポルテへの変換期に行われた技法の分析、調査研究を行い、その調査結果を基に分析例集を作成することを目的とした。

現在のファッションは、1950年代から1960年代にかけてのオートクチュール(高級婦人服)の創造を基盤として成立してきた。そのオートクチュールから量産化するプレタポルテ(高級既製服)への変換技術を探ったのが、上記の研究である。この研究にあたり、1950年代から1960年代に活躍したオートクチュールのメゾンで、現在でもプレタポルテ製品のジャケットが調査対象となり得る5社を選んで調査した。ジャケットの調査は素材、表生地パターン、縫製にわたり、デジタルマイクロスコープ、x線、メジャーや定規による計測、目視で行われた。また、この研究では非破壊を研究ポリシーとしたが、その後の展示に耐えうるよう一部の裏生地を解き、内部の縫製を調査した。研究報告

書は300ページを超えるものとなり、当初予定の技法分析例集を完成させることができた。しかし時間的制約もあり、生地による実際の組み立て調査までには至らなかったため、パターン及び縫製においてなぜそのような処理を必要としたかの結論を出すには不十分であった。そこで、今回シャネルによる1960年制作のオートクチュールジャケットをさらに詳細に調べ、実布で試作を行うことでパターンや縫製のさらに踏み込んだ調査を行い、技術の解析を行った。

なお、シャネルのメゾンや本資料の調査については、報告書に記載があるため、省略した。

## 2. 調査方法

上記の研究と同様、「現代衣裳の原点を探る—ウォルト作品の復元—」<sup>2)</sup>の調査と同じ方法で行った。パターンについてはポリエステル60番糸を用い、地の目に沿って方眼状に糸を通し、碁盤の目状態にパターンをとり、作図を行った。また、その作図を基にレーヨン紙に写し、生地に負担をかけないようにシルクピンで最小限に止めて確認した。先の研究では上前となる右身頃の表生地のみパターン取りであったが、オートクチュールという性格上、顧客に合わせて左右差を付けていることを考慮し、左右のパターン、および裏生地なども全て調査対象とした。試作用綿布を使用し、何度か両身頃の試作を繰り返し、パターンを決定した。縫製に関しては先の研究結果を基に実際の資料を再度確認調査しながら組立縫製作業を行った。

### 3. 使用素材について

本研究は複製品を作るのではなく、製作過程の縫製の意味について調査することを研究目的とした。そこで資料の生地はウール100%のツイード生地であったが、同じ素材は手に入らなかったため試作では、同じツイードで綿31%、レーヨン12%、ナイロン13%、ポリエステル44%の素材を使用した。但し、オリジナルのチェック柄が5cm 正方であった為、試作布も5cm 正方のツイードにこだわり、柄合わせを同じように出来るようにした。裏生地は資料と同じサテン地のシルク100%を使用した。打ち合い先のスプリングホックはオリジナルと同様の直径7mm のものを用意できた。袖口開きボタンはオリジナルと同じ直径21mm がなかったため、20mm で形状が似たものを使用した。ジャケットの裾についている喜平の鎖も19mm のものが手に入らず17mm のものを使用した。肩パッドは使用されていない。綿芯のバイアステープも綿100%と同じ素材で出来る限り似た厚さや手触りのものを探して使用した。また、トリミングの先のモール糸はウール100%のものが見つからず似たような風合いのモール糸、ポリエステル100%のものを使用した。

### 4. パターン調査結果と解析

#### 4-1 後ろ身頃と衿

オートクチュールという顧客に合わせたパターンということで、当然左右差が生じるが、方眼状のツイードという生地特性を生かし両身頃のパターン取りを行った。パターン上では滑らかでない線もツイード特有の生地を動かし変形させることで、ラインがなめらかに縫製されている。今回は裏生地が表生地に縫いとめられているため、裏生地を別にパターン取りをするのではなく表生地との比較で寸法を取った。

資料で見たところ、裏生地のパターンというものがない。表生地に合わせて地の目だけを揃え、多めに裁断して表生地に沿わせている。そこで、裏生地のパターンは一応作り、軽くしるしを付けたが、実際縫製するには地の目を合わせ多めに付けた縫い代で表生地の縫製に合わせて最終縫い代を縫い合わせる時に切りそろえながら始末した。

身頃、袖ともにトリミングを付けた長さまで裏生地が延長して付いていた。

トリミングの布地は前身頃先から裾まで一周つなげて裁断し、角でダーツを取ることで身頃に沿わせている。

衿は表裏をわがちで裁断し、裏側は地の目を変え、

後ろ中心で接ぎを入れた台衿を付けて仕立てられている。

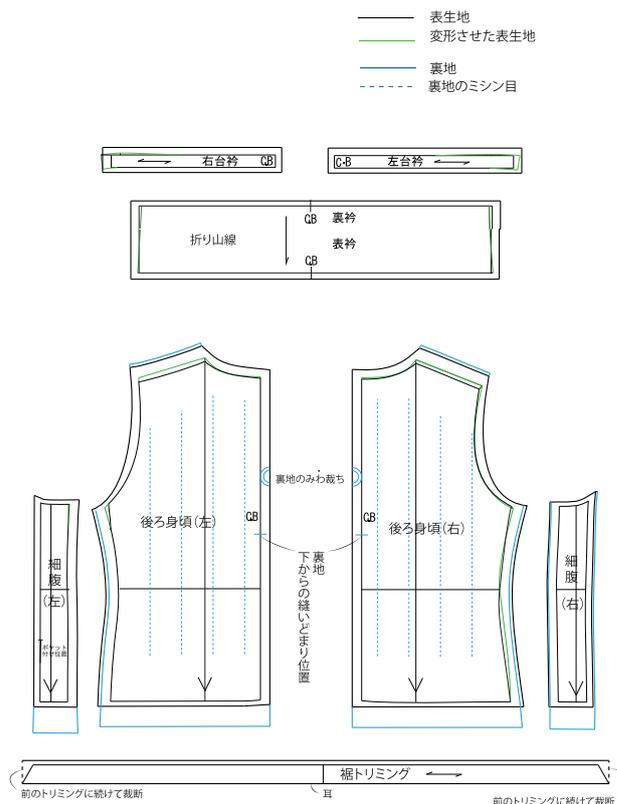


図1. 後ろ身頃と衿

#### 4-2 前身頃とポケット

胸のふくらみは裏生地がダーツで縫われていても、表生地はいせ込んで始末されている。これはイタリアでもオートクチュールではよく使用される方法でお化けダーツなどと言われ、表面的には何も処理されていないように見えるが、実際にはいせ込んでアイロン処理をすることにより、立体的なシルエットを作っている。表生地をアイロン処理などで変形させてから、裏

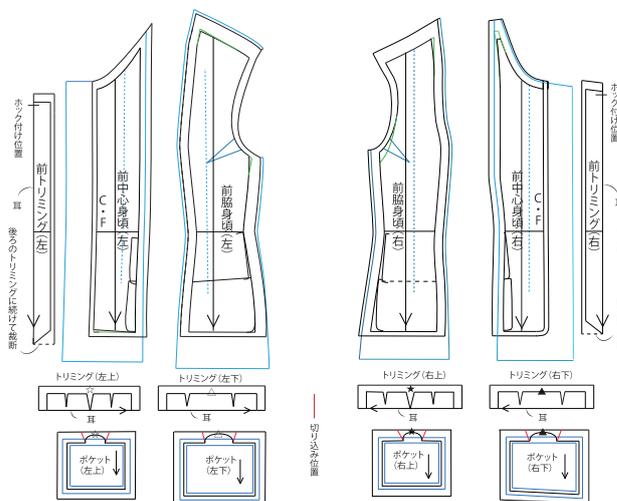


図2. 前身頃とポケット

生地で動きを抑えて立体の形状を保っていることがわかった。

ポケットのトリミングはカーブに沿うようにダーツを取り、なおかついせ込みながら付けている。

#### 4-3 袖

袖はツイードの特性を生かし、伸縮せずに縫い合わせてから、裏生地で後ろ袖の袖口開きの上でダーツを取り、その形状になるように表生地はアイロン処理を行い前側の袖に沿わせ、前振りの袖形状を作っている。

トリミングは他と同様に角でダーツを取り、形に添わせている。

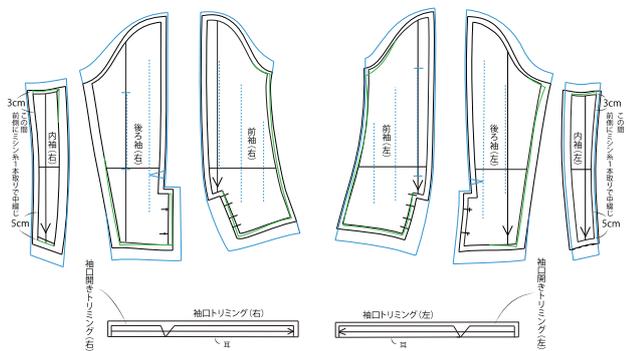


図3. 袖

### 5. 縫製試作による解析

#### 5-1 裁断としるし付け

表生地のツイードがほどけやすく、形状が保ちにくいいため、長方形で裁断し、縫い代無し型の型紙をのせ、裏地裏打ちの妨げにならないように表側に長く、裏側に少なくすくって、しろも1本取りで通ししろを入れる。しろの入れ方で表生地がわからなくなってしまうようにする効果もあると思われる。



図4. 表布裁断

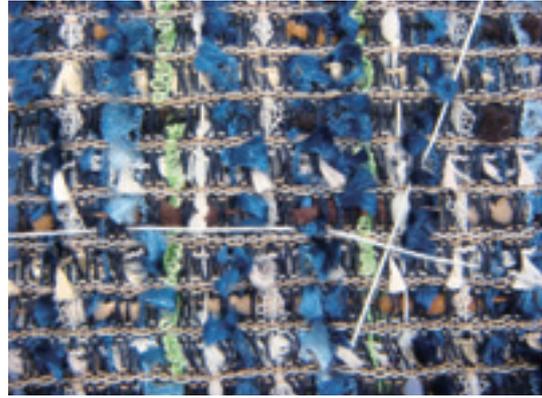


図5. しるし付け

#### 5-2 トリミング

オリジナルのトリミングは表生地の耳を使用しているが、今回使用した生地は耳がフリンジ状になっているため使用できなかった。また、オリジナルより少し薄手であったため、たて地をわ裁ちに使用してトリミングを作成した。

わの先にオリジナルと同様に紺のモール糸を1本取りで縫い入れた。これにより縁がはっきりする。白いモールによるスカラップステッチは縫い合わせてから行う。

オリジナルはスカラップステッチ糸が1本取りであったが、同じ太さのものが探せず、1本と2本で試し、似た見た目になる2本取りを採用することとした。



図6. 上は入れる前、下は紺のモール糸を淵に入れたもの。



図7. 上：オリジナル 中：2本取り 下：1本取りのステッチ

### 5-3 身頃縫い合わせ

裏地と合わせてステッチを入れる前に後ろ中心だけは表生地同士縫い代先まで、裏生地は後ろ中心わ裁ちの縫い代1.5cmで裾から31cm上までミシンで縫ってから、右身頃側に片返して表裏生地を合わせる。

ミシンで縫い合わせた後ろ中心の表生地は余分な縫い代を切り揃えて、アイロンで割る。



図8. 多い縫い代は裁断する

裏生地も長方形のまま、表生地と地の目を合わせて置き、後ろ中心がずれないように、しろも1本取り、ななめじついで止める。



図9. 表裏生地合わせ

裏生地をステッチで縫いとめる位置に型紙を乗せて確認し、表生地の地の目に沿ってしろも1本取りでななめじついで止める。



図10. 表裏生地を合わせてしつけ

表の地の目に沿ってパターン寸法でミシンステッチを入れ、表生地と裏生地を合わせる。(3cmに9針)

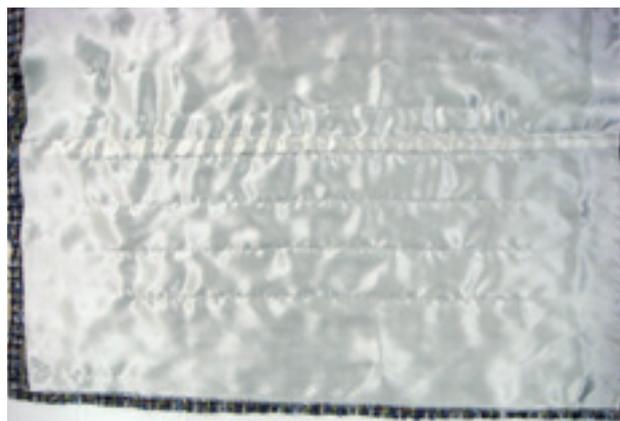


図11. ステッチで表生地と裏生地の縫い合わせ

ミシンの糸は返し針ではなく、全て中側で結び止めている。



図12. ミシンの糸始末

前身頃の胸の立体は、表生地はいせ込みをして裏生地をあて、ミシン糸1本取りななめじついで戻らないように止めつける。

裏生地はアームホルダーーツで処理してから表裏生地を合わせ、ステッチを入れる。



図13. 前身頃表生地の胸いせ込み



図14. 前身頃裏生地のダーツ

前身頃中心ピース衿ぐりにバイアステープ(2.5cm幅)をしるしが中心になるように乗せ、ミシン糸1本取りで並縫いで止める。



図15. 前身頃衿ぐりのテープ



図16. オリジナルのテープ

表生地と裏生地の合わせとステッチは細腹以外全てのピースで同じ作業を行う。細腹はステッチがないので、中心で動かないようにしつけて止めておく。

各表生地ピースに裏生地がついたら、裏生地をよけて、表生地同士をそれぞれミシンで縫い合わせ、前中心・前脇・細腹・後ろ身頃と一続きになった時点で、トリミングをつける。

裏生地縫い代の前身頃の切り替えは前中心側、前後とも脇布は細腹側に倒し、切り替えを縫い合わせる。そのとき、中綴じではなく前身頃切り替えは上から7cm下がったところからトリミングを含む裾から8~9cm上まで、細腹はアームホールから、トリミングを含む裾から8cm上まで表生地もところどころすくってまつりとめてある。裾の始末が出来るように下から8cm上までは裏生地だけで始末していると思われる。

トリミングは長さを確認し、角をパターンの寸法でダーツ状に縫い合わせ準備をしておく。

前身頃先にバイアスの綿テープ(1cm幅)を0.8cm身頃側にのせ、トリミング縫い合わせの時にミシンと一緒に縫う。その後、ミシン糸1本取りでテープを千鳥がけで身頃に止める。

トリミングと身頃の縫い代はアイロンで割り、両側にコバミシンをかける。

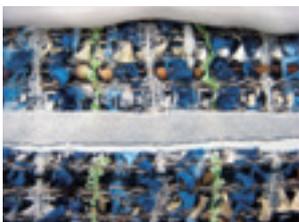


図17. 綿のバイアステープ入れ



図18. バイアステープ千鳥がけ



図19. オリジナルバイアステープ千鳥がけ



図20. 前身頃打ち合い先のバイアステープとトリミング

トリミングの角はダーツ状に縫い、中心に切込みを入れてアイロンで割り、割った縫い代はミシン糸1本取りで千鳥がけをする。



図21. 前身頃打ち合い先のトリミングの角(表側)

#### 5-4 肩縫い

テープ幅の中心に縫い目が来るように前肩に綿バイアステープを乗せ、肩線の縫い合わせの時に一緒に縫いとめる。



図22. 前肩線のバイアステープ



図23. オリジナルの肩バイアステープ

表生地縫い代はアイロンで割り、裏生地は後ろ側に片返しして、しつけてとめておく。

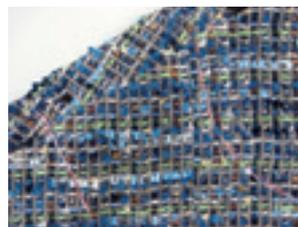


図24. 表生地肩線縫い合わせ



図25. 裏生地肩線縫い代始末

表と裏生地身頃を整えて合わせ、衿ぐりとアームホールの出来上がりに合わせてしつけをし、生地が動かないように身頃側に斜めじつけでとめておく。

衿ぐりは出来上がりの1mm縫い代側をミシン糸1本取りで星止めする。

その後、多すぎる縫い代は切りそろえる。



図26. 身頃表生地と裏生地の合わせ

#### 5-5 衿作りと衿付け

衿は表と裏衿がわ裁ちで裁断され、裏衿は短く表衿と同寸になるように台衿がたて地で接ぎ合わせてある。

台衿との接ぎ線は縫い代がアイロンで割られ、両側にコバステッチが入っている。その後、左右のたて線を裏側からミシンで縫い、アイロンで縫い代を割ってから、表に折り返す。



図27. 衿のしるし入れと縫い合わせ

表に戻した衿の端に一周、紺色のモールを表側から入れる。



図28. 衿の角と紺のモール入れ

あらかじめ、多めの縫い代は切りそろえ、衿の付け側は出来上がりにアイロンで折っておく。

身頃と衿は表裏ともに手でまつり止めてある。

身頃は裏側の台衿のところで折り山になるため、表衿にゆとりをつける。その分量を確保するため、しつ

け糸で折り山線を斜めじつけでとめておき、表衿の付けに少し段差を付けて裏衿より0.5mm程重ねてまつっている。



図29. 衿付け

最後に左衿付けから身頃にかけて一周、スカラップステッチを入れて仕上げています。

#### 5-6 袖作り

袖のピースごとに裏生地と合わせてステッチを入れ、内袖を縫い合わせた。内袖にはステッチがないために、前外袖側に上から約3cm、袖口から約8cmの間で縫い代にミシン糸(1本取り・針目1cm)で中綴じをする。

裏生地の上側縫い代は縫い代を折り曲げて、しつけで止めておく。



図30. 内袖の縫い合わせ



図31. 内袖の中綴じ



図32. 裏内袖のしつけ

袖口のトリミングは、ボタンホールのところは縫い空け、角はダーツを縫って形に添わせる。アイロンで縫い代を割った後、両側にコバステッチを入れる。



図33. 袖口トリミング(裏側)



図34. 袖口トリミング(表側)

裏生地のボタンホールは切り込みを入れて、ミシン糸1本取りでかがる。



図35. 袖口のボタンホール(裏側)

トリミングの先に白のモール糸でスカラップステッチを入れる。



図36. 袖口のスカラップステッチ

袖はアイロン処理をして形つけてから縫い合わせるのが通常であるが、ツイードの形状が柔らかいものであったため、そのまま縫い合わせて裏生地は袖口開きの上でダーツをとり、前側と縫い合わせて前振りの湾曲した形にした。

袖口開き止まりから上の部分は表生地の縫い目をアイロンで割り、裏生地を前袖側に片返しでまつる。



図37. 前後外袖の縫い合わせと裏生地始末

袖口の開きを図のように始末する。

### 袖口の開き始末

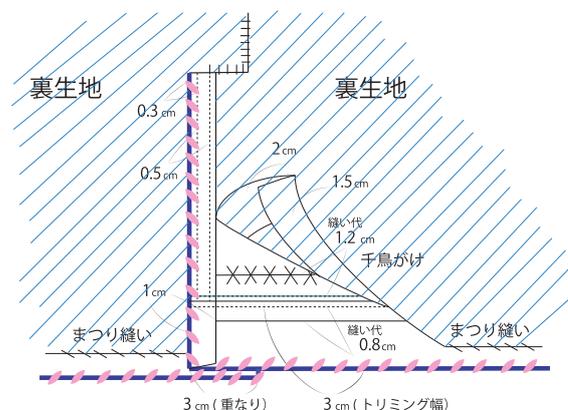


図38. 袖口の開き始末

袖口はきちんとした開きが出来ているが、開かないように袖口先の角をミシン糸1本取りで4~5針縫いとめている。



図39. 試作袖口の開き(裏側)



図40. オリジナル袖口の開き(裏側)

### 5-7 袖付け

袖つけの縫い代にはぐし縫いを縫ったあとはないが、ツイードなのでミシン縫いの後で抜いてしまってもわからないため、今回は袖山にしつけ糸2本取りで2回、袖山に沿って0.3cm、さらに外側に0.3cm、縫い代側にぐし縫いをした。アイロンで身頃のアームホールと同寸になるように整えてから、柄に合わせてピン打ちをして、裏生地側からしつけをした。

ミシンは前身頃の裏生地のダーツ位置から縫い始め、3cm位縫い重ねている。

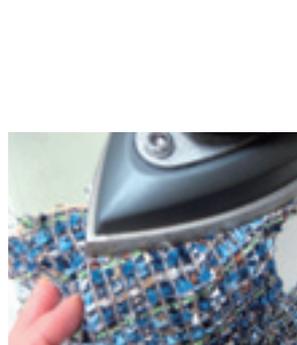


図41. 袖山のアイロン

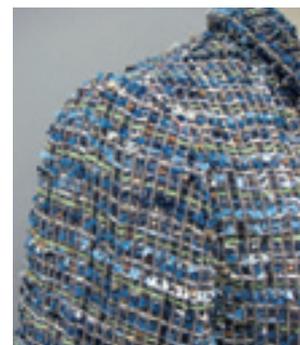


図42. 袖の柄合わせ確認

ミシンで縫った後、アームホールと袖山の縫い代はアイロンで押さえ、表・裏生地とも一緒に上は1.2cm、下は0.8cmに切りそろえる。

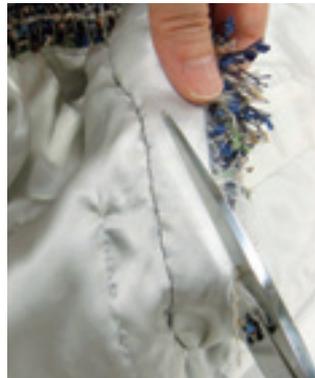
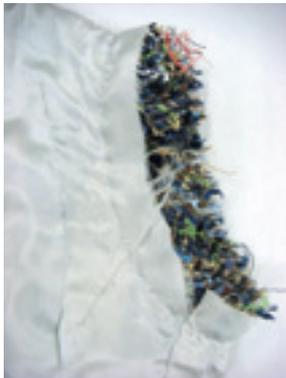


図43. 袖山のしつけ(裏側) 図44. 縫い代を切りそろえる

裏生地のアームホールはそのままミシン目の際をしつけし、ミシン糸1本取りで細かくたてまつりで止める。裏地の縫い代は中綴じがされていず、裏袖山のまつりがところどころアームホール縫い代まで止まっている。



図45. 裏袖山をしつけする 図46. 裏袖山のまつり

ポケットをピンで留めて確認したところ、袖の振りはほぼオリジナルと同じになった。



図47. 袖の振り(試作) 図48. 袖の振り(オリジナル)

## 5-8 ポケット

ポケットはつけ位置を確認し、身頃と同じ柄になるように型紙にしるしを入れ、裁断する。

トリミングはポケット口の丸いカーブに合うようにダーツをミシン糸1本取りで手縫いし、アイロンでつぶし、出来上がりでアイロンして形を整えておく。

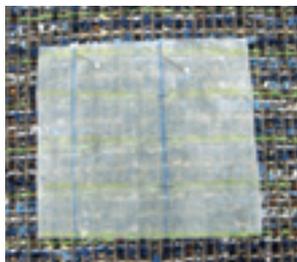


図49. ポケットしるし入れ 図50. トリミングのダーツ

ポケット口にあわせて出来上がりに少しいせ込みながら、トリミングを載せる。しつけをしてミシン糸1本取りでまつりとめる。

その後、切り込み位置ではさみを入れ、左右の縫い代は裏側に倒す。

トリミング側にミシンでコバステッチをかける。

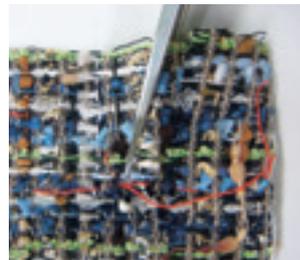


図51. トリミング付け 図52. ポケット口の切り込み

形を整え、トリミングの外回りにスカラップステッチを入れ、表より少し控えて、裏生地をミシン糸1本取りでまつり止める。



図53. ポケット完成(表) 図54. ポケット完成(裏)

本来はピースが小さい時点で作業を行うため、ダーツを縫った後、ポケットを作成するが、裏生地をライナー代わりに裏打ちして留めているため、ポケットは最後に身頃に止めつけている。袋布の周りには手で簡単に縫われているだけで強度はない。デザイン性が強く、見せかけで使用されていないと思われる。



図55. ポケット付け

### 5-9 仕上げ

#### 5-9-1 ホック付け

ホックは前身頃の上端に付けられているが、スプリングホックをミシン糸1本取りでボタンホールステッチの巻きぬいをしてから、付けている。裏生地はその部分開けたままになっている。

#### ホックの付け方

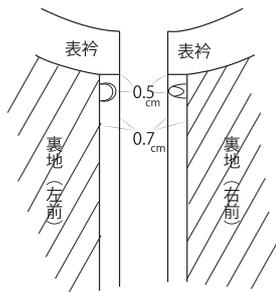


図57. ホックの付け方



図56. ホックの巻き縫い



図58. ホック左



図59. ホック右

#### 5-9-2 袖口開きのボタン付け

ボタンは2つ穴で柄に合わせて着色されている。ボタン付けは、糸止めではなく0.4mmに裏生地を4つ折りにしてまつり、ボタン穴に通して根元を結び、結んだりボンの裁ち端を糸でかがっている。試作では裏生地がオリジナルより厚かったため、同じ幅のサテンリボンを使用した。袖開きは見せ掛けなので裏ボタンなどもなく、開け閉めする強度はない。



図60. 色付けしたボタン



図61. オリジナルボタンの付け方



図62. 試作ボタン付け完成

#### 5-9-3 スカラップステッチと裾の鎖付け

オリジナルは右前衿付けの先から衿、左前、裾、右前スカラップステッチに渡って一周続けてスカラップステッチがトリミング先にされている。同じように試作もモールを続けてトリミングし、最初と最後のモール糸は衿付けの縫い代に入れて始末した。

裏生地の裾はゆとりを持って縫い代を折り曲げミシン糸1本取りで、なみ縫いで軽くとめてある。その上に錘となる喜平の鎖をミシン糸1本取りで、鎖の上下を身頃に留め、ところどころ返し縫いをした。



図63. 裏生地裾の始末



図64. 鎖付け

完成



図65. 試作作品・右側面



図66. 試作作品・正面



図67. 試作作品・背面



図68. 試作作品・左側面



図69. オリジナル・右側面



図70. オリジナル・正面



図71. オリジナル・背面



図72. オリジナル・左側面

## 6. まとめ

オートクチュール作品の中で最も毛芯など作りこみのしっかりしたものと、その対極にある芯やパッドなど最も何も入れていない資料の作りを探るために今回本資料を選んだ。前回は毛芯で立体造形として彫刻を作るように作りこんでいき、生地も厚く動きが少ないため、着装者によって服のシルエットがあまり変化しなかった。理想とするジャケットのシルエットを重視する場合有効な作業であると感じられた。これに対し今回のシャネルジャケットは着装者の身体に沿って立体が形作られ、なおかつ胸のふくらみなど立体造形の美しさは最小限の生地で留め付け、表現されていた。また、着心地はとて軽く真綿でくるまれているような感覚である。シャネルという女性のデザイナーの資料でデザイナー自身もよく着装していたことから着心地のよさにこだわったデザインと言える。

簡単に作られているように見えるジャケットだが、表生地はとていろいろな色糸で構成されたツイードであり、裏生地はシルクを使用し、裏打ちの役割も果たし、縫製の縫いとめ位置も作業の邪魔にならないように計算されている。いせ込みなどの処理で立体がきれいでほっそりと見える。パターンも素材にあわせて考えられ、縫製も無理なく作ることが出来た。時代を経てもなお愛されるデザインである理由が理解できた。

オートクチュールであるため、ピースの縫い合わせ以外はほとんど手縫いで仕立てられている。量産化は難しいが、手縫い仕立てにより、少しずつゆとりを持たせた縫い合わせ方が着心地のよさも生んでいると思われる。

今後は「ファッション創造における芸術的技法の解析研究」<sup>1)</sup>の資料としてスーツで購入したパンツについて調査する予定である。パターンだけではわからないアイロン処理の技術についてさらに研究していきたいと思っている。

## 7. 註

- 1) 平成23～25年度 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 研究報告書「ファッション創造における芸術的技法の解析研究」杉野服飾大学、2014. pp. 30-35
- 2) 平成19～21年度 私立大学学術研究高度化推進事業オープンリサーチ・センター研究成果報告書「現代衣裳の原点を探る—ウォルト作品の復元—」杉野服飾大学、2010.

\*上記2冊の報告書については、杉野服飾大学ホームページから検索してすべてのページを読むことができる。URL (<http://www.sugino.ac.jp>)

## 8. 参考文献

- ・エイモンド・シャルル・ルー『シャネルの生涯とその時代(普及版)』泰早穂子訳、鎌倉書房、2010.
- ・Melissa Richards, *Chanel Key Collections*, Hamlyn, 2000.
- ・Amy de la haye, Shelley Tobin, *CHANEL The Couturiere at work, The Making of a Master* (1994), V&A, 2013.
- ・Claire B. Shaeffer, *COUTURE SEWING, The Couture Cardigan Jacket. Sewing secrets from a Chanel collector*, The Taunton Press, 2013.

- ・北折貴子他著「ジャケットにおけるオートクチュール技法の解析」(杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部紀要 vol. 13、2015) pp. 1-13